633-91
1200501542046
633
91

8. 2. 27

新川柳自選句百三十三人集

井上劍花坊編

新川柳
自選句

百三十三人集

（昭和七年）

柳樽寺川柳會發行

633-91

叙

自句自選の、詩歌の世界に於ける價値、効力については、昭和五年三月發行にかゝる昭和新興川柳自選句集の叙文に、大略を述べて置いた、その時、こんなことも云つた、『他の詩歌は暫らく云はない、我川柳は人間を題目とした人間の詩である、その眞を知ることが、作者自身に限る、と云ふ本質を最も多く有する詩歌である、自分の持つ詩歌は此の如き者であると發表して世間に問ふ、といふことは、必ず自選を待たねばならぬ』と今日に於ての自分の考へも大體に於ては、これに同じではある、が、その後、出來上つたアノ自選集に見、また「川柳人」の誌上で、毎月自選句集を二三句づゝ掲載する者に見、その後、時につけ、折にふれ、自選を諸作家にさせて試みた成績によると、成る程、自家の面目を出す、自家の人格を見せる、といふことには成功するが、これを社會の詩として、人間の詩として、あらゆる文學の標準を楯にして觀察すると、必ずしもこれを名作とも、秀作とも云へないのである、幼稚が好い、無技巧が好い、と云つても、それには程度がある、藝術常識から見て、白は白、黑は黑であるべきを、赤が黄で有つたり、青が紫で有つたりすることは、よしや問題がちがふ、類推することが出來れば深い問題では無いとは云へ、論理が合はぬやう

に思ふ、要するに僕が常に云ふ、學、天人を極め、識、古今に絶するに近い、理想の選者が選評して、而して得た者に比すれば、自選の句は、特に自選といふことに興味を持ち、變つた味を見出だす、といふ以上に、特に名什佳作を得る、といふことはむづかしいのである、が但し自家に一箇の主張を持つ人、多年の經驗を積む人、廣く讀み深く究むる人、この詩について一個特自の識見を有する人はこの限では無い、或は、選者に理想の選者の無い今日で有つて見れば、却て自選に於て佳句が得られる、といふ變態が生ずるかも知れない。

前の自選句集が刊行された時は、その編輯者は白石維想樓氏で有つた、さうして自分は、柳樽寺に於て刊行されるが故に、其主宰としての責任がある、といふ位で有つたが、今度はともかく自分が編輯者の首位に居り「川柳人」編輯部の人々が、之に參加された、といふことになつて居る、よつて、精讀とまでは行かなかつたが、ざつとは目を通した、それによると、其皮に觸れて、其肉に達せない者もある、況して其肉を透して骨まで刺して居るといふのは、あまり數は無いやうである、但しそれは、我々が志ざす新興川柳の將來の理想を標準として、遠慮の無いところを言つたので、大體に於て、之を彼昭和五年度に比較すれば、非常に進歩して居ると斷言が出來る、もつともそれも人々の立場によつて、感情によつて、見方はちがふ、今日の我等の主張を是認しない、所謂

既成川柳のにほひのある人や、藝術至上主義の句を以て、至上の川柳と心得て居る人から見れば、退歩と見るかも知れない、今度の集へ出された百三十三人の内で、前回の時の自選集に出句された人は、僅々三十名そこらであるに見ても、其他の人達は、自分が此處で進歩といふ字を用ゐることには、大に不服かも知れない、が、それは時代の相違、意見の相違で、敢て問題にするには足らない、自分が昭和三、四年に亘つて唱導した川柳王道論が、多少は形を變へながらも、文學以外の世界にも及び、滿洲國さへ出來ることになつたことを、淺識不才でありながら先見を誇ることはしない、が、現實に卽する卽ち川柳現實論を掴んで離さなければ、其主張がいかに淺識不才の人から發しやうと、眞理として永遠の權威を持つ、といふことは云へる、それが時代である、進歩である。

前回の自選句集が、たとへ維想樓氏の編纂だつたにせよ、やはり柳樽寺の事業で有つたことは爭はれない、さうして彼を第一集とし、此を第二集と呼ぶことも出來るのである、こゝに改めて當時の主唱者だつた維想樓氏に敬意を表することに吝かで有つてはならない。

昭和七年之冬

井上劍花坊

凡例

一、前回の昭和新興川柳自選句集の時は、白石維想樓氏が、ひとり編纂者として之に當つたばかりで無く、自ら之が宣傳、誘導に全力をあげ且つ廣瀬白鷗氏等、多大の助力をした人もあつた、その最初の試みたるに拘はらず、かなりの成績を擧げた。

一、今回は、新川柳興立三十年記念として、どうでも之が行りたい、といふ自分の考から出發したものだが言譯で無く實際の多忙は、事、言と伴はず、いたづらに氣がせくばかりで、「川柳人」誌上で兩三回の廣告をしたゞけで、その他に手も廻らず、宣傳費も捻出するの餘裕が無かつた。

一、編輯部同人諸君も、ひとしく其擧には贊意は表せられたが、いづれも多忙の職務を持つて居られる人であり、また「川柳人」編輯といふ大責任があるから、其力を分つことが出來ない。

一、この時、編輯部の一人吉田名川氏が、是れ亦非常の劇忙の身でありながら、敢然之れに當り、出來るかぎりの努力を拂はれたので、ともかく御覽の如き體裁を得るに至つた、なほ印刷所に渡してからは、名川氏を佐けて、小池蛇太郎氏が、校正其他のことに當られた、ともに記して其勞を多とする。

一、この集の題名は最初「みそささい」とすることに豫告してあつた、三十年記念の三十を「みそ」と利かせ、書名として他に類が少ないから、といふ愚案だつたが、字の如く愚案で、いろ〳〵議論も出たので、斷然之を止め、加入柳人の員を其儘に「新川柳自選句百三十三人集」とした、箇々自家の集中より數句、數十句を抄出したものを蒐集したのだから、川柳らしい妥當な書名だと思ふ。

一、上述の如き、行き屆かない準備だらけのこの編纂事業に、前回に勝さる加入者、句數を得たことは、諸家が斯道に熱心なのと、我々の擧に信頼を持たれたからだと、改めて謝意を表する。

昭和七年十二月

編者識

目次

井上剣花坊……一―五
井上信子……六―七
池田菱明……八―九
泉たみ子……一〇―一二
泉伊行……一三
石原秋刀魚……一四
稲荷雅堂……一五
伊藤寸坊……一六
石井寒山……一七
河本宵果……一八―二三
橋本緑雨……二三
蜂谷春秋……二四―二五
原田巳佐喜……二六
西崎十潮……二七
道柳しん平……二八―三七
富澤紅壺……三八
大石鶴子……三九
大島濤明……四〇―四四
大塚治兵衛……四五
大槻破天高……四六―四七
岡本嘘夢……四八―五〇
岡本和木坊……五一
岡田哲朗……五二
小山内法外坊……五三
小野原石楠……五四―五五
小野寺東山……五六
小栗空木……五七
渡邊仁華紗……五八
渡邊頭瓦……五九
片岡陽氣坊……六〇―六一
加藤石風……六二―六四
川上一剣坊……六五
風間光作……六六
金森舟月……六七
勝山しとし……六八
甲斐こまを……六九
河村可水……七〇
勝田聖象……七一
吉川黎火……七二―七四
片瀬帆太……七五
吉田茂子……七六―八〇
金子美津坊……八一
吉田名川……八二―九〇
吉成剣突坊……九一
田中ていざ……九二―一〇二

高根一弦……一〇一—一〇五
高木滿山……一〇六
玉造松園……一〇七
田邊霞村……一〇八
田卷秋缸……一〇九
田原是空……一一〇
永井草明……一一一
堤　水叫坊……一一三—一一三
中島國夫……一一四—一一五
中谷默郎……一一六—一一七
中沼若蛙……一一八—一一三
中尾成愚……一一三
仲田眞紗志……一一四
中津江　伊佐奈……一一五
中山夜泣石……一一六
名川邑人……一一七
內田銀川……一一八
內田小唄呂……一一九
小林白鳳……一九七
河野鬼策……一九八
綾井龍五郎……一九九
安藤醉月……二〇〇—二〇一
相澤勝平……二〇二—二〇三
相澤學人……二〇四
阿部俊一……二〇五
青木富士雄……二〇六
齋藤虛空……二〇七
佐々木三福……二〇八—二〇九
三枝九鳥……二一〇
佐藤十九坊……二一一
佐野天郎……二一二
坂口至陽……二一三
北村美代子……二一四
行弘柳之助……二一五
目瀨たゞ秋……二一六
三澤鴻山……二一七
宮崎叫洲……二一八—二一九
三代川　瓶一路……二二〇
新谷七日堂……二二一
直原那岐坊……二二二—二二四
新海南坊……二二五
城山曉天……二二六—二三〇

倉光唐四郎……一三〇
山口○坊……一三一
山中自笑……一三二—一三三
山村比呂志……一三四—一三五
山本銀雪……一三六—一三七
山見風柳人……一三八—一四〇
山口屋素山……一四一
山本一線……一四二
山內日出坊……一四三
矢原無瀨井……一四四
前田盜閑……一四五
萬木東狂子……一四六—一四七
松尾柳思朗……一四八—一四九
松田柳湖……一五〇—一五九
松永美吉……一六〇
丸山千噫樹……一六一
富士野鞍馬……一六二—一六四
古込一輪……一六五
藤井赤とん坊……一六六—一六八
藤田西風……一六九
古川一匹……一七〇—一七四
深野千里……一七五
福澤可樂……一七六—一七七
藤川賢明……一七八—一七九
福田壽……一八〇—一八一
藤井米三……一八二
福島克巳……一八三
小森狂夢……一八四—一八五
越田久水……一八六—一八七
小池蛇太郎……一八八—一九〇
小門半門……一九一
甲野狂水……一九二
甲野きく子……一九三
小宮骸花……一九四
小林秋人……一九五
兒玉津根三……一九六
廣島笑人……二二一
島田欣子……二二二—二二四
平井可嘲……二二五
平澤小柿……二二六—二二七
姬野大豊……二二八—二二九
森田白舍……二三〇
元木義雄……二三一
守永天庵……二三一
鈴木龍芳……二三二
速水眞珠洞……二四四—二五三

目次終

新川柳
自選句

百三十三人集

井上劍花坊句抄

民草のスグの眞上の紫宸殿

天翔けるトンボの壯圖戀の畏

夜ル夜ルを失なはれ行く處女の數

向フ臑後ろは無事なふくら脛

づばぬけた大きな石はまだ賣れず

勇悍に燃え夏虫の死の偉大

神になるより人間になる努力
一天に雲ちる畫の白い悲み
讀んで組む活字活字にまみるる血
都大路を糞車曳く
黎明の大氣の中に開く花
屠牛場へ來てあと戻り出來ぬ牛
法律の罠人が掛け人が落ち
よりかかるから飛びのけばころぶ女
あとから押し押しみんな落ちた
ぬすまれて空氣の當る金に成り
三井でもちやりんちやりんとはした錢

猿だけで置けば好いのに人にする
母となる眞劍父となる遊戯
こいつを崩すにはと大厦高樓を見廻り
けものから剝いで人間あたたまり
家作持つ和尚小金を貸す牧師
高殿の方へかみなり先に落ち
つんぼうの心耳に地軸廻る音
日めくりを剝がずに居ても日は進む
東照權現御神體は狸
滿洲を思へば火にもあたられず
ダラカンのふところ深くゆすり金

ブルジョアの珍食會に飢饉食
御神輿に擔がれるので目が廻り
大戰のあとの國家に寡婦の數
墳墓にも媚びず死屍にも鞭うたず
蠅の戀人は無情の蠅たゝき
象つかひ踏まれて聲も立てず死に
御神輿を投げてさつさとみんな散り
それぞれに畫がく世界に我を置き
と云つて置いてあとで搾取
汝元來善人なるが故に餓死
貞操に通貨の如き時代價値

汽車の窓區切り區切りに飢餓の村
今盜つた金を受取る燒鳥屋
所澤から大野分突ツ切つて
大なる夜ルなり罪の戀も抱く
半天を燒いて絕美の大入日
出來ぬ日は一茶一句も出來ぬなり
ぬす人が跨ぐ夫婦の寢入ばな
時代色鼠賊の墓に四季の花
上役をその上役がまた叱り
抱き合ふた人骨が出る比翼塚
ふくらんでまたふくらんではちきれる

井上信子句抄

理性からちらく漏れて出る焔

みな物が尖つて見える世紀末

明日は紙屑勿體ないは今日ばかり

心臓とおなじ色素で染めた旗

上下からしめられてゆく架空線

行く先は知らず連鎖を外れた珠

石ころけ落ちて己の座をしめる

絶頂の瞬間明日を忘れ

親の手を離れた日から眞人間

眞空の蒼さ未來を持たぬ色

壓迫の夏を透さぬ水の底

青空へすつきり立つて無神論

磨く新芽に紅葉慄へる

氷塊へ陽の矢をむける春の王

池田菱明句抄

愚弄されながら安堵の飯を喰ひ
振出しのすでに責苦を負ふ姿
おしなべてパンを與へる神の嘘
足並を揃へて自己を僞らう
草萠えし新興國の血の肥料
たどりつき死座ときまりし古疊
國策に默して弄り殺されし
敬禮をしても冷たい瞳をくれる
青空をけろり忘れた自殺者

狡獪をつゝむ紫煙の太葉卷
生活の虚實に觸れてゆく疲勞
惡名であらふ貫く日の淋し
拾ふ骨白し人間性の光澤
ねじくれた心を春の陽にあてる
恙なく寢息の沈む破れ疊
食ふだけを考へつめて無精髯
俗塵をうとみて冷ゆる朱肉壺
重箱の朱塗へ春の囁ける
强度のヒステリーだとさ三日月
眼の色も捨てて受難の世へあゆむ

泉たみ子句抄

陽春へ伸びる柳の芽の力

窓枠の指紋重なり亂れ居り

室内をよみかへらした窓の笑み

一千九百三十一年から失業苦

眼を閉してからも稻妻又光り

空腹が鮮人の飯見て通り

言ひ過ぎた朝工場で手を嚙まれ

愛されて過分の餌に金魚死に

海水着屈托のない顏ばかり

曲線に水たはむれて波となり

ガツシリと踏まへ天地を見くらべる

星のふる下に花火は直ぐに消え

炸裂の音を熱がる晝花火

誘惑の巷羅衣派手に居る

羅物を風がなぶつて肌が見え

すが〳〵と髮を洗ふと蔦が舞ひ

喧嘩にもならず默つて馘首され

生意氣と思ふ意見も聞いて置き

缺食の兒童慰問にしかみつき

片身丈け熱が足りない硬化症

切り張りの鋏へ秋のしみる冷へ

煙草の火又叱られる穴をあけ

破れ戸を信じゆつくり夜を休み

常盤樹に雪に疲れた色もあり

群星を飛び越えて逢ふ流れ星

逢へば賞め蔭でさげすむ同しロ

天地から呼びかけられて芽の準備

玄關の　大衝立に躍る龍

飛ぶ鳥を落した頃の夢を見る

就職のその日心から笑ひ

泉伊行句抄

人生の一路伸びたり縮んだり

どの窓も夜業するらしビルディング

藝者町朝は煮豆屋のみ通り

貞操を月賦にきめて飯につき

觀衆の前に拔手を派手にする

ソあちこちを失戀させて嫁に行き

熱球を飛ばして先に職に就き

門鑑を示して朗らかに通り

世の中が明るくなつた湯の歸り

身を裂いて巧に蜥蜴生き延びる

石原秋刀魚句抄

圓みなど持たぬ巨石の地に埋れ
我れ獨り弱きと賜五分に斷ち
腹立てゝ物言ふ端を見出さず
口唇を借して寂しき父へ酒
春の宵女あやぶく過きる街
振り上げし腕に貧しさからみつく
貴婦人の乳房空しくたゞ圓し
白粉を洗ひ落した妻の眞實
弟に食す竟りの姉は茶を飲む
圓みなど持たす女に暮れし日よ

稲葉雅堂句抄

陽炎をまるめて地肌の精を抱く
五月雨を越えて草鞋のかるやかさ
船唄の強さに搖れる赤い旗
靜けさの底に沈でゐる破船
深みゆく空の青さに和した雁
黎明と死の眞中に芽を吹いて
永劫の月に媚びてる波の色
何故尖る薔薇よ因果を泣く勿れ
崩れたる夢想の塔へよぢのぼり
裸木が雨を含で伸びる朝

伊藤寸坊句抄

金のため漸く首を縦に振り

三等車百面相を置く枕

大學を出てしばらくの玄關番

ソレ逃げたソラ又飛んだキリ〳〵ス

日本のかなた五色の旗の國

スポーツを自慢の娘脚線美

農村の不安を知らず田植唄

月賦でも食ふに逐はれてやぶれ服

この蛙泣くかと踏めばキユーと鳴く

同窓の會に恩師のもう見えず

石井寒山句抄

俺こそは我こそはと今日もすぎ

團結に背を向けると豪らくなり

泣きもせずどッと血を吐く時鳥

幻滅の悲哀をそゝる妙なる音

我が笑みを鏡に映す險しい目

ひとの罪發く刑事が犯す罪

配給米食べる兒童の無心の目

七轉び八起きで墓場すぐの前

たつた今手紙を讀んで叔父になり

てつぺんへ移し植えたいあごの髯

河本宵果句抄

音もなく試練の炎燃え上り
極光を浴びて昏々雪の層
南國の陽の饗宴に渡る鳥
烈炎に轉がり込んだ不發彈
約束の日へ一ぱいのねじをかけ
とぼとぼと歸る姿の骨に似る
累卵の痴戯にからみつく情火
ぽつ念と思案の上に灯がともり
泣いて居る骨だ秋風そつと吹け

また酒で汚した秋の日曜日
どの彈が當るか無茶な機關銃
愕然と朝の活字が打ちのめし
この鏃の凶と出る日も驚かず
法網とすれすれにして世をくぐり
彈痕の呻きを壓す戰捷譜
情熱を壓しむつちりと乳房
あたふたと草鞋が消した綿火藥
鐵壁へ蜘蛛となる夜の大嵐
寢靜まる壁へ突きたつ冬の咳
窮鳥の搏くまんま明け放れ

張り切つた線をきりきり横に織る
火を探す風ひつそりと地を歩み
伴奏の悲壯血を吐く喉笛
鐵蹄に惚れて夜明の土が鳴る
灯を孕む障子を染めて積る雪
味方から敵の出る日の大饗宴
くるくると秋を包んでころがる葉
灯のともる迄嚙み合つて分れたり
へとへとの足にからみつく音譜
朝霧の流れる山を縫ふて唄

暴壓に潰れんとする血の袋
血を咲いた花をづかづか踏みに來る
切れさうな鎖に明日を約したり
動かない石をめぐつて吠え續け
烙印を押されてブタの箱を出る
陰慘なあかりを吸ふて血が粘り
鎌首を上げて見直す地上權
混亂の巷疚しい賽を振り
組みたてた締木が攻める契約書
水のない陸へじりじり追ひ上げる

一本の箸は別れてそれつきり

叱らない叱るさびしい眼にふれる

さいころの果敢ない向を見つめたり

ただ残る白さを處女を抱く夜

壯嚴の奥にぽつんと骨の壺

いさぎよく碎ける覺悟前へ出る

觀衆の眼に勿體ない涙

算盤の桁を合せて寄つて來る

よろよろとよろめく線を引きに出る

死に切つた顏に最後の薄化粧

橋本綠雨句抄

北風に雀一三羽向つて來

障子張年寄りくさいなと思ひ

唇は赤し男は來てくれず

窮窟な思ひをして金の事

折鞄靴のかがとがありません

だまされて女のゆくへもあるものか

内風呂にねても電話の電報の

仲買のするどい顏に氣がまける

童貞にかゞやく白の卷脚袢

庭先のつゝじに素足ふと感じ

蜂谷春秋句抄

健康の第一線に立つた齒牙
冷笑を突きつけられてゐる悲劇
濁水を呑んで一時のかてにする
澄み切つた空へ情痴の星の群
泣くまでの苦衷に胸の裂けんとす
多からぬ智惠を絞つた骨の髓
一杯の飯に尖つた骨があり
大都市の波止場に立つたストライキ
神經の尖りへ知覺過敏性

見苦しい焰が顏に燃へて出る
只一つ儉約をせぬ笑顏なり
磨かれた智惠がまばゆく反射する
斷言の出來る理屈にひざまづき
奴隷でもよい金錢の其れなれば
限りなき此の生命を引掴かみ
プロといふ狹心症に病み疲れ
行き詰る中へ無言のまゝ蹶起
器ではなしと見事に突き返す
火を吐けば堂に溢れて寄り集ふ
賣り出した此の腦味噌の値がきまる

原田巳佐喜句抄

我が家の溫味へ丸くなつて寢る

四十年只空想を描きつゝ

別れては我が身に歸る日の寂し

水面の月の丸さに風もなく

ゴミ箱の團扇の骨の社會觀

黎明の大地を踏めば朝の音

手から手へ疲れ切つてる金の色

灰皿の煙り蛇とも見える夜

讀經に心の衿をかき合せ

默々として愛慾の指が伸び

西崎十潮句抄

皮肉にもばつたり逢つた心臟の皷動

安眠を追ひまくらるゝ移動ベッド

失業に五十錢ある通帳

神聖の議事と稱する泥試合

合掌のかげに鋭い眼が光り

切髪も合掌も未亡人は倦きた

感激のノドをかすれた應援歌

汗みどろ今日一日だけは過さるゝ

荒馬に秋を飛ばせる鞍の味

疵物にされたこのかたの捨鉢

道柳しん平句抄

陽の光知らぬ土龍の無神論

重詰めに一番遠い内裏雛

雲の上では何時も晴天

褪せながら枝へ必死とすがる花

其の幹の冬に堪えたを葉は知らず

時計たゞ巻かれただけをほぐすのみ

物慾の皺か増えゆく掌

障子を取れば柱まで邪魔

日當りで咲かうとどれも這ひ廻り

山一つ越せばまだある高い山

籠の中餌のない空へ飛びたがり

散るだけをみんな散らして枝默す

法悦をふつくり抱いて眼を閉ぢる

草に寢て蒼穹の宏さに抱かれたり

酷烈の陽へ喘ぎゐる草の痩せ

一葉の輕さとなつて枝を去る

膝抱けば背骨へ秋がよりかゝる

飯を嚙み嚙み幻想を追ひ

咲け咲けと外氣を知らぬ根の教唆

天井へ明日の夢を描いて寢る

醉つて寢た枕の凹み氣づく朝

大嘘がのさばる世相隅で覗る

背景を知らぬ亂舞へつきぬ唄

存分に馬鹿を踊らす馬鹿噺子

破壞から創造舞臺裏の音

笑つてる群へ舞臺の廻る音

感情を開いた口から覗かれる

庭石を顎で動かす懐ろ手

冷笑のまざ〳〵白い歯が列び

何もない暗に神祕を探してる

古釘の様に曲つて寢た姿

仕方なくいつもの子守唄で眠る

空も澄む水も澄む秋の空腹

草を踏み土を蹴り感激の足の裏

北風をひとり背負ふて街を去る

家庭から笑ひに街へぶらり出る

鶏も犬も裸足だ春の土

忍従の手へ凍傷がはち切れる

眞ン中の灯の衰えを覗く闇

慕ひ寄る手にはつきりと爪を見た

のび〳〵とふて腐つてる檻の中

砂埃被つて今日を賣れ殘り

人間の手へも蠅取紙ねばり

みんな默つて砂を嚙むやうな飯

金槌と同じ使命へ曲る釘

醉つてゐる馬鹿醉はずゐる馬鹿

撥ね上げた力こんどは壓す力

朧から醒めて冷い空財布

唄もなく春のリズムの中に居る

釣鐘のうつろへ春の日が永い

刑務所と同じ位の塀にする

千人の盲人の中で眼を閉ぢる

自分だけ入るとピタリ扉を締る

白眼の眞只中に解く武裝

憂鬱を蹴つて立つたが金はなし

糞壺を出て糞壺へ産みに來る

眼を閉じてみても瞼に踊る夢

金の音させるとゾロリついて來る

どの蓋もそはぬ黄金の壺一つ

ぶち割つた鐵扉の中もたゞ空虚

冷笑の中で默々道を掘る

爆笑の窓を見上げる松葉杖

朗らかに笑つて今日を封じ込む

言ひ敗けた己が姿を抱いて寢る

嬌聲をあげて夢幻へたぐり込み

溜め息で曇る鏡へ今日も向き

接吻に冷い金の總入歯

鼻唄で敷いて涙であげる寢床

體臭を撒いて銀座の灯へ群れる

富澤紅壺句抄

むつとしたけれど立場を考へる
金で濟む話を女口惜がり
はたの眼も不快にしてる物思ひ
それとなく機嫌を探る聞き直し
姉さんは養子をつまらなく貰ひ
父何か母の文句におとなしい
氷山が少し動いて極地暮れ
女房の若さが匂ふ歳の市
聞けばたゞ笑つてるだけ使の子
討論へ遠く無口の薄笑ひ

大石鶴子句抄

間斷のない地すべりを祕める胸
純情をしつかり抱いて群れを行く
聲量をまつ毛ハツシとはね反へす
正しさへ向いて瞳の靜かなり
ハイといふ言葉の中に占める位置
とこしへに甘えつきせぬ父母の膝
さやうなら古き時の我温み
我もまた一人のイヴになつた今日
一歩づゝ一人歩きの眞劍
はつきりと人生へタツチ

大島濤明句抄

△社會

怒る眼と媚びる瞳の世の欺瞞

法律に債權だけが匿まはれ

只平和ばかりで此世すまされず

就職口奇跡のように一つ出來

証文で縛りおほせた心算なり

鐵拳と握手のなかに生きる道

△思索

自殺者のその決心を尊む日

こうすれば斯くなる丈けの機械機器

冗漫な思索を笑ふ蟻の塔

吹殼の煙についてゆく惰心

この兒又育てばこの世呪ふらん

いさゝかの疑念を持たず刃は光り

△自然

水草へそと媚びて水流れゆく

汗ばんだ野良着へ稲の花豐か

初秋の風に重たい豆の蔓

研ぐ鎌へ早出の月が微笑める

主を信じ牛を信じた牧の朝

鍬一つかつけば廣い田や畠

△世紀

四つ肢であつた世紀の人の幸ち

何時の世に野山へ返へる牛や馬

文字のない世界でうたうほんとの詩

繩律の時の刃をくるみかね

産卵へ蛾の執着の一と廻り

△歡喜

大聲で笑ふ餘裕を持ちて幸ち

よろこびは乳をくはゑし兒の瞳

我が愛の盆に溢れる兒の笑顔

有難や皺深かゝと母の頰

合掌の先きから續く無邊光

△生活

畏あまた遁れ〳〵て四十一

白日へ凱歌をつゞけ愚を續け

墓近くなりてぞ墓が恐はからず

胃袋へ手招きをする飯の艶

禽獸の群にほろ酔ふ酒はなし

田圃から歸り醜い新聞紙

大塚治兵衛句抄

逢て見て初めて氣付く平凡さ

何事か捲起らんとする靜寂

非番まで狩り出した辻々の月

恐ろしい世相勳章金で買ひ

何となくチラリと見せた威力なる

網の目を潜らんと學ぶ法律

誘惑と氣付いた時は泥まみれ

押入をブツタ切つた正當防衛

ハンモツクモダンガールの高鼾

縮少の後から續く失業者

大槻破天高句抄

氣まぐれに呼べば捨犬尾を振つて

飢えてなく聲かと思ふ蟲をきゝ

生きてゆく行進曲のしやがれ聲

肉體既に生れた時に縛られて

繰返す爭議は知らず實る秋

魂の萎縮を迫る鞭の音

機械だらけの中から唄ふ聲

喰ふ事の外に若さのうづく春

貧農と呼び富農なる者は無し

眞理今亂麻の治下に目をつむり

喰はねばと云ふ眞劍に身を碎く

個性をまげて通る近道

はツとした時は引金引いてゐた

人でない迄の節約强いられる

鐵骨をもろくも崩す黑い風

俺が吹いて俺がきく俺の笛

不用意に笑つて牙を覗かれる

畜生を脫した時のデスマスク

岡本嘘夢句抄

地に落ちた影が痩てるあぶれた日

はち切れる日迄を鞭の下に居る

一枚の紹介票にすがりつき

胸板へ來る匕首へ目をつむり

合理化だ餓死だ穩やかすぎる月

搾られてあと白々と灰の冷

黎明へあらしをついた作業服

醜悪な顔鏡の從順

神の名に追ひつめられて飢える群

人にならうとして獄舍への行進

無理矢理に世紀の型へあてはめる

流れる血を踏みにじる泥靴

法律にない悪いことしてやらう

傳統の網をぶツつり切る思索

死の線へぢり〳〵と奴隷證

足跡の一つ一つへひそむ自我

登り行く足へ鐵鎖の法の枷

崩れゆく土臺の上でうろたへる

不平言ひ〳〵縛る警官

先覺と一人信じて闇を這ふ

張り切つた肉を最後の楯にする

山の色都會の夏へ呼びかける

脫げ出す前へ銃劍の整列

靜寂の心の奥の灯をみつめ

束縛を切る足並へ迫まる劍

あたふたと利權のわなへ轉び込み

生活を奪ひかへしに朝をゆく

頭とは別な議論に媚びて生き

三井の救濟一日八錢

大衆と背中合せの政治論（政、民、黨首）

岡本和木坊句抄

飯櫃を抱へた子供に飯が無い

もう死ぬるばつかりになる子を抱いて

死は終に親の涙を奪ひ去り

信仰の眞ッ只中に出た奇蹟

今うつら〳〵と神の國に居る

死脈から本然と立つ子の寢息

弓張れば矢は中天の月を射る

標本となるべく針で貫かれ

隅つこに居たが刄を研いで居た

地に還る肉を五十年の盾

岡田哲朗句抄

工場の泥沼はゲンゴロウの生活苦
灰を見つめて二つの感情
冷鞭の下につのり行く熱情
ふつくりと毛皮にくるんだ冷血
錯覺に安んじたタコ壺のタコ
激流となつて理性を決壞し
カナリヤの求めた自由は飢え死
追つかけて追つかけられて墓穴まで
純情が躍る素朴な紙の旗
ヒョツコリと出た現實の道化もの

小山内法外坊句抄

つるはしは壞して建てるシンボルだ
感激の一夜に明ける現實苦
舊劇が裏から見せる新時代
ヒョツトした嘘に命をかけちまい
光明に飢えて一團沈默す
折角の光明花火のやうに消え
霧の中大斷層を凝ッと見る
一發が意外な世界の幕をあけ
民族の胸にひろごる默示の火
天降る叱言の末は給仕なり

小野原石楠句抄

測候所晴曇風雨どれかなり

開拓のシヤベルシヤベルへこもる熱

アツといふ間もタクシーの硝子越し

張つめた心のゆるみ金が出來

作業服たつた一人へ足らぬ糧

法廷に立ち振り返る虚榮なり

下積の履歴書春の風に遭ひ

應援歌マラソンよりも渇く喉

貞操をしつかと抱いて闇を行く

抱擁を待ち續けてる十餘年

默々と床屋へ首を預けてる

つり皮に時々ふれる腕と腕

掛取へ挨拶も無く蓄音器

うか〳〵と奈落の底を見し悲哀

滿洲へ行けばたんまり食へるだろ

十人が十人ながら嘘をつき

働きなさいつと叫ぶパンの聲

五十年金、金、で無爲無策

毒婦だと叫ぶ心の爛れ切り

ぬいでもぬいでもじつと出來ない暑さ

小野寺東山句抄

身を投げて火となる心ぢつと抱き
花畠めぐつて蜂の吸ひ飽かず
砲聲に怯えし鳥の飛べずなり
忍從の疊に腐る膝頭
さて次の嘘に猿の子餘念なし
盲牛の目障となる角があり
飢ゑたるへとぐろをまいて燃える酒
鳥さへ唄はず處女のゐない村
つぎ〳〵に業火を焚いてめぐる球
黎明へ飛沫を切つて死のゴール

小栗空木句抄

雪空の足場へ寒い風の聲
色のない夢は五月の雨に明け
すぐ裏が野原に續く小鳥籠
リクサックズツト日向の道が見え
糊紐の手を染めて居る二日酔
二本目は銅壺に輕く立される
生酔を大事に出して店を閉め
氣疲れも衣桁へ掛ける帶の巾
白粉の香も懷しき妻の留守
蛇使ひこの觸感に生き呆け

渡邊仁華紗句抄

貧乏のまつただ中へまた生れ

がんぜなく母のむくろにたはむれる

屈辱も知らずゴミ箱あさる犬

敬虔に打たれ何んにも語り得ず

食へないのだ人口過剰

コチコチと一つ一つに過去の音

頑是なき子を食膳へうつむかせ

かたり得ず無言の儘のむくろなる

たゝかれてうちのめされて握る鎌

寄生蟲ふり落されて死ぬる秋

渡邊頭瓦句抄

平和の裏に待ち構へてる殺陣

しつかりと握つた鍬に血の通ひ

廻れ右一體俺は何處へ行く

戀文だ離縁狀だペン先の冷笑

ペン先を見守つて勤續二十年

ずば〳〵と言つて退けたあとの寂寞

奈落に光る瀧壺の誘惑

祕密とは人間だけの持つ弱味

誰の爲めに肥えていく豚だ

遠吠だけなら犬だ

片岡陽氣坊句抄

人間が春にならねば春でなし（病中吟）

生きんとする喘ぎ見苦しき闘争

死ぬ事を止めたが寧ろ哀れなり

默アまつて死ぬ事さへもゆるされず

先づ以て嘘も禮儀の内に入れ

共々に泣いて貰ふて慰める

貧乏と戰ふ間衰へず

否寧ろ人と生れた惱みなり

我勝てり人生五十、三つ餘し

嫂と語るに動悸靜まらず

ハンケチで拂ふて二ア人腰をかけ

野良猫の寧ろ自由の子を孕む

天井の蠅がしつかと冬を抱く

風へ背を向けて渡しの船を待つ

忍從じや進歩じや地震、風、洪水

燒き捨てゝくれとあるので燒かれない

ライオンの子はライオンを怖がらず

競爭に敗けたか空の流れ星

エプロンの下は娘の姿なり

寄り添へば人の心のさにあらず

加藤石風句抄

燃へて居る筈の地球に水が湧き
一枚の紙舟が折れ鶴が折れ
昔も無く月もぐるぐる廻る球
愚痴もなくせつせと破れを蜘蛛直す
水平線彼方に戰禍の土地があり
火の個性がパンを燒く家を燒く
名も皮も殘さずなめくじの死
鐵瓶を外せば雪の積る音
賤が家に山悉く與へられ

眞ん丸く浮世を三日月抱きたがる
宇宙みな泣いてる樣に雨降る日
區別あるが儘に稻の同じ色
陽の惠み受けたる紙の裏表
蓮根の隙間をじツと土守る
泣き暮す涙を枕受けて居た
皺くちやの型に飛行機山を視る
沙漠から離れてラクダ不具の型
石器時代あれやこれやを繼ぎ合す
六角の掟を守る水晶ぞ
乾し鰯へ入陽が殘る漁師町

今捨てた水其の儘に氷つてる

疲れ切る櫻花の下に人騷ぐ

航海記西に傾く陽が淋し

叩かれる砧平和な音を立て

べた〳〵と人の巣になる土を塗る

レントゲン彼の世の人にして視せる

賤が家が名畫に見ゆる初日の出

木に一つ人の許した柿熟す

石垣へ草決束を固めてる

人と人と繋いで丸い輪が出來た

川上一劍坊句抄

都會の描線に溶け込む貧相

一本立ち出來ない足を二本持ち

左側通れ思想は右を行け

教會を出ると斬りつける風

遊びたりなかつた十九年

たら〳〵と眞冬へ落ちる汗の玉

ルンペンの寢顏を狙ふ軒しづく

屍の小山を踏んで平和來る

風間光作句抄

花と蟲

おしめ竿の下で朝顔が咲いてる長屋

蠅取り紙の蠅へ止つて無事な蠅

でも蚊は幸福です血を腹一杯吸つて殺されに

街と女

香水へ又すきつぱらを思ひ出し

夏休み文具店今日も閑にねる

轉換期

地球は廻る人は地球に負けて死ぬ

コメビツの叫びへ痩せた妻と俺

金森舟月句抄

汗と血と流してたつた之れしきか

人間の眼子は金に奪はれし

脱しても心は元の道に置き

がつしりと唇をかみ血走つた眼子

國民全部一錢づゝくれたら

呪うかに此の不景氣へ散つて行き

碧空の大空へ唯流す涙

限り有る地上に暮らして限る食

人間の希望の最後は死なのだ

ガソリンの香高く暮れにけり（高岡大都會）

勝山しとし句抄

ブルとプロ皆天孫の御裔にて
吸へるだけ吸うて動けぬ蚊を見ずや
嘲笑を胸にひそめてさりげなく
明日道を説く唇でキッスもする
其の通りやれば食へない教なり
生れ出たばかりに何の欠伸なる
眞劍になるな〳〵といふ世相
ルンペンに錢を與へて手を洗ひ
俺達がなどゝプロレタリアのつもり
失業者の統計など取る有閑階級

甲斐こまを句抄

黄金を冷視の出來ぬせち辛さ
物皆が食ひ物に見へる空腹
みんな伸びてる中に縮まる
下手に伸びて伸ぶ頃縮む平凡兒
去年のカン〳〵をのせて汗も出ぬ夏
アルプスに舞ふ洋菓子の包紙
それ程遅れてるノサとシャア〳〵と迎へてる

河村可水句抄

東京に寶の山がありますよ

權力を無力に金がする世なり

泥水を呑んだ爲の玉の輿

高鼾かいて様子を能つく知り

大將の腕白時代は己の部下

履歴には子供の九人書けないか

失業で履歴書の字がうまくなり

押賣を斷る手段沈默す

精力旺盛にして用途なき淋しさ

我が母を知らぬ女の母となり

勝田聖象句抄

逢ふて見りや戀に浮世の皺がより

逢へばいつか袖にする氣が抜けてゐる

らく書きは人にはあらずかたつむり

公平の土をもぐつた薯の蔓

巨匠默々と閻魔を刻む

吉川黎火句抄

文明の餘澤へ十字路の悲哀
やけくそで思想の渦へ卷かれ泣く
觀念の連鎖の人へ向けた銃
そうだらう、うしろぐらいやつだつた
負けたんじやない讓りました
決心の彼方へ闇の手が伸びる
その隙へ道德もなく椅子を得る
偶像を抱いて女の初一念
屍骸も殘さぬ爆彈と諸共に（三勇士）

鐵拳の下に正義の眼に涙
嚴格な家庭に私生子が生れ
餘りにも崇高だつた繼母の死
親の氣も知らねーでザクリ切つた髮
調印をせねば一家は飢に泣く
稽古着を纏へば筋肉の呻り
輕々と今砲丸を投げんとす
朽ちざらん五色の旗へ春の風
私生子へいくぢなし奴と母の價値
さりげなく拒絶した夜の大蜘蛛
張り裂ける胸へ地主の無理を聞く

ゲンノーの一撃へ九百斤の牛
恩賞も無き亡國の劍に起ち
ドタン場へ行つて運命判斷所
同じ慰問へ俺の名は蟲眼鏡
死の道へいま信念の光りすぎ
食へるならもう滿足と云ひなさい
肩いつか吾を忘れて風を切り
捨てられて雲の行方を見る悲哀
粗衣粗食諸病恐れてよりつかず
二十九のまだ膝小僧抱いて寢る

片瀨帆太句抄

髮の毛を伸ばしたがけの美術學校
黑があるから白へ惚れる
ポカンとして居て達人大觀
ルンペンの或夜の瞬り燒鳥屋
ふんわりと踵にのせた曲線美
見詰むれば夜々天井にある神祕
平然と住まれ鬼門も役立たず

吉田茂子句抄

ぴつたりと閉ぢておのれを守る貝

そつとして仕切だらけの中にゐる

覺めきれぬ心へけふの問題

くろ〳〵とよごれて續く人の道

一日の疲れがのぞく足袋の底

やれ靴に疲勞がきざみこまれてる

夕陽を背負つて疲れたかげを投げ

笑はせて泣かせてぱつと下りる幕

ゆれ動く秤の上に立つこころ

つゝましく行けば横ぎるものばかり

素裸になつて心が抱き合ひ

追ひぬけばうらさびしさが先に立ち

しとやかにそとさし出した手が尖り

とんがつたこころが脈に音をたて

どうしても生きねばならぬ人間苦

夢のみが勝負を超えた明るい世

うつくしい心心の扉を開く

つくねんと音なき部屋にそむく春

力拳どうせ一度は合はせる掌

筒ぬけの空でひねもす鳴きつゞけ

ひざまつき陽にも月にも掌を合せ

吹き消されまいと心の灯を守る

一つぬぎ二つぬぎ人間らしく

一切の清算打込む釘の音

断崖へ導く道とも知らず

偽りをぬいだ視線にすめる空

抱き合つた刹那假面をぬいでゐる

山岳を二つに裂いて雲はしる

よき夢のかげらをぢつと抱きしめる

心臓の響き亂れぬまでの春

赤は赤でも日の丸の旗

はたはた〳〵と鳴る國旗の感動

シヤベルを持つ腕に軍旗をひしと抱き

桐紅葉遂にはおなじ秋一葉

秋の散る落葉もろ手に握り占め

金子美津坊句抄

食券を淋しく貰ふ影を踏み

想ひ出のそれも儚ない指の節

しつとりと露を感じた身の悶え

切り張りが段々殖える兒の育ち

花傘の假裝へ三味が呼びに來る

指相撲今後負けない顔の皺

湯豆腐へ今日の寒さを繰り返し

玄關を大きく踏んだ子の歸り

問題の女今度は髷に結ひ

切れ切れに兒の臨終へ母の聲

吉田名川句抄

青春の虫が故山に納まらず

長舌を弄し所信を翻へす

聖業を提げて肉彈先きだてる

裂けなんとする胸しばし押默り

惡の芽と知らず培かふ五十年

向上の眼に追つかける白い虹

漲つた力ためしに突く都心

靈感の湧くペン先に紙碑を彫る

臍嚙んで本氣になつた馬鹿力

自衞のために內から開いた

血管を環ぐるマコトの叩く音

正月は父母の膝下のお正月

政爭といふ國難に氣がつかず

姦商に國の死活を握られる

心眼をあけ廣大な物を見る

日輪に顏はまともに見せられず

削つた鉋を削り返した節瘤

星雲の中に孕んだ人の種

引力が圓く黃ろく光つとる

日輪と驅けくらをして出る精氣

墓穴まで伸びきる爪がつきさゝり

砂一粒で廢物にした

下タ手に出てつかんだ

人面と獸心正體はどつちだ

屋根裏に住んでも鏡すてかねる

焦燥が勝つ鬪ひを負けにした

一椀の飯も生涯胸にある

一旦は堀下げてある摩天樓

平凡な履歴書だが大人格者

ベンチすら滿員である疲れ足

零落の眉庇に雨まで冷たい

冷汗に尙追ひ迫る四方の眼

一番不安な的の眞ン中

猿に猿種人に人種

松の種の何と小さき

雪を汚しても第一の足跡

信に漲る手足の强さ

錆鐵を烈火の中に還元

烈火の中へ鉛の猛進

古本が時を嘲る棚の隅

反噬に知つた本當の我が力
泣いて會ふて微笑みで別れ
おさへても利かない大地を割く芽だ
誰が植えたともなく雲をつく大樹
土が食へると思ふか減俸
ぐん〳〵伸ばす匿名時代
せめて寫眞にだけ笑つてやれ
燕汝が第二の故郷も飢えて來た
驀進の汽車を横斷した一秒の自信
味覺を唆つて食はれた苺

攀ぢ登る手の力草力なし
正體を糺せば錢といふ魔像
貧乏の粉なを天から神が撒く
ムラがあるから生き物なのだ
靈妙な舌も時たま齒にかまれ
頑張るかの如く屬吏三十年
内心の恐怖が牙を突きむける
懷中のダラーが唆る高笑ひ
人相學にもない金難の相
裸體で來れば裸體で迎へる

情熱が肌から拔けたあとの皺
狂つた頭のテツペンから巨篇聖典
非を飾り嘘をいふだけの正直
草を食ふすべを知らずに飢ゆる犬
海の上ほんとに生きたお月樣
冷え切つて神や佛になり下がり
潔く骨になる氣で脫いだ肌
捲上げる錨非職の坐に乾く
故郷近く先づどの顏にまみえんや
二枚戸がしつくり合ふて鎖す門

あんなにも星を隱して居つた空
押倒す力はないが押つゞけ
寢て見たい草にはどつと鐵の柵
草の實の莢割れがする底暑さ
逆さまに映じて水の國となり
からみつくつもりで炎よく踊り
泥の味知つて一生池の物
掘り進む道にガツチリ岩の層
投上げた捧逆さまにおちて來る
たんまりと埃りを吸つて日は沈み

歡びがぽたり〳〵と拭き切れず
際限もなく欲しがらす富の價値
舌といふくせものが居る口の中
圖太さで切通したが心細い
唄ひ切つた時心臟の最後（心太君逝く）
禁錮だ死刑だ其後の勝だ
闘志を祕めた笑ひの電光
迷妄を追ひ出す朝の戸を開ける
紅色を塗れば火となり血ともなる
亂心と見せて急所をつく言葉

吉成劍突坊句抄

悠々と田舍に誇り顔で居る
貯へるばかりで戀も知らぬ蟻
聞く人もないに唄つて憤り
結局は娘を持つた方が負け
休まずに廻る地球に負けて死に
金の世でしばしの首をあづけられ
金貸の隣に住んで子澤山
藝者の羽子板に乃木大將
寢て起きるやうに死んだり生れたり
山のある限り伸びたい木の願ひ

田中てい

澄み切つた空切り取つて窓にする
銃口を出るまでヂツと冷えて居る
今蒔いた種の白さを土に見る
土くれが皆光つてる夜の空
地球みな色が變つて春が來る
勝つことの裏にみにくき物を見る
一枚の金貨となつて世を嗤ふ

女氣の馬の鼻息にも恐れ
ポプラみな風に叛いて冬の空
馬に見る笞と同じ眼を見たり
支那町の夕を光る壺五つ
いつわりが又いつわりを追つて來る
冷え切つたまんま銀貨が落ちて居る
待ち佗びた姿を足の線に見る
冬冬の空の底から顔を出し
だしぬけの高さで火の見櫓立ち

壺持てば壺ひんやりと夜を教へ

くら闇に地主の家のたゞ黑く

嘲笑をヂツと背中が堪えて居る

馬場先に不二を見つける男の子

深呼吸一つ一つに山が見え

——五十鈴川にて——

東京で見られぬ水の色を見る

火吹竹女房可愛い〻顏になり

フト酒の味のにがさを知つた朝

溝の水から淺草の夜となり

盃の底を見つめる切れ話

木と木と木木と木と木と木みぞる〻

妻と云ふ名へ北向の窓が有り

院本の道德それを妻守り

押し迫るやうに石塀續いてる

樂の音につれて鼻振る象淋し

澄み切つた空へ赤面するがい〻

考へてごらんと云つた切りの母

石たつた一つになつた母のこと

——亡き母へ——

好きだつたからと佛へ鮎のすし

雨銀の色に見えた日死んだ母

涙持つ花の色をば探したり

くら闇の中にひとりをとじ込める

こわ〳〵に見上げる空の深さです

叮寧におじぎをされて淋しがり

苦勞人だと一言に云ひつくし

一本の肱の上なる夢の國

てのひらの上を冷たい風が行く

かんじんの命が減つてしまひます

半圓の虹の中なる霧の街

ガマロがパチンと云つた闇でした

彦七の馬を見上げる女の瞳

たゞ一人机の塵を拭く心

大掃除から晴れ切つた空嬉れし

ふとつてる友達の無いのも不思議

力瘤にも頼りなき影の添ふ

蝦の脚ほどにオールの氣が揃ひ

うり家と女の書きし字のあわれ

楯も無くたゞ胸板を張り切つて

——京阪に遊びて——

絹ごしの闇にちらつく祇園の灯

京の雨祇園を出でゝいく曲り

淨るりで知つて居る名の停留場

源平の夢を見て居る淡路島

稽古屋でヒの字をシだと直される

目をつぶるそこに違つた世界あり

情熱の瞳をさけて闇を見る

積み上げた金の高さの憂欝さ

はだか灯に巫子たゞ一人目をつぶり

兵隊の黄色くつかれ果てゝ行く

有明の鐘に冷たき塗枕

地球儀をくるりと廻す嬉しい日

今更に秋の鏡の恐ろしき

沈默のまつたゞ中の役者

かみそりへキラリと秋の空うつり

悲しさを笑へば落ちる一としづく

吾心雪の色にも滿されず

濡れて居る睫毛だまつて窓へ來る

辨當屋廣告屋ほど背負つて來る

コニヤックのコップ伏せれば石の音

ころがつた石の一つになつて寢る

紙に似た白さで一人殘される

風船屋春の空氣の中に居る

冬眠の蛇へ地球のまわりかけ

わびしくも春へ出て來るがまがへる

あなどりを背中に受けて獨り居る

澄み切つて居る盃が恐しい

四面壁そんな世界に吾を見る

夕立の一とこ蒼い蒼い空

水ばかり飲んで目高のやつれやう

ピストルのやうに默つて一人居る

高根一弦句抄

戀文へそつと觸れてる袂糞
信じろと云ふた彼奴の黑い腹
默つてる石の哀れへ觸れてやる
飢えて行く或る日子供をしかと抱き
何もかも忘れて小僧の居眠りだ
齒の努力舌に美味さを横取られ
失業者寒くはないかふところ手
職もなくさびしくしやがむ花の山
物足らぬ生活の中で齒を磨き

蹴られても石は子供を樂しませ
新世帶朝々歡喜夜々歡喜
丸髷に結はして死ぬ迄側に置
何時迄も誇りきれない處女の價値
親の年追ひつめられて子が育ち
母の肌隱さぬ愛を子に擴げ
十二時を打つて時計がホツトする
世が變るやうに默つた夜の底
月ばかり眺めて居れ・ぬ朝が來る
コツ〳〵と雞舍寢飽きた音を立て
勳章が目當で戰死は出來ません

大病の知らせ不安な鴉鳴き（是心院様を憶ふ）

悲しいも知らず畜生人にぢやれ

諦めて居ると悲しい嘘もつき

臨終へ肩すれ〳〵に覗き寄る

泣かないでお呉れと女我れも泣き

やるせない心佛間で香を焚き

出棺の鉦にどんより雲が垂れ

馴れた道今日ぞ最後の棺で行

埋棺のさびしく土に隔てられ

掛軸の取れて淋しくなつた部屋

天體の無限うか〳〵人は生き

苦の娑婆だ泣け赤ん坊たんと泣け

不意に來た年でもないに又慌はて

石ぢつと他力を待つて唯默し

人間の舌を揶揄ふ海豚の味

死ぬ藥はんこを持つて買ひに行く

二度生きる工夫をみんなが諦めた

木の根っこしつかり地球へしがみつき

ぎつしりと詰めて餘りの骨を捨て

棺桶だ火葬だ忙しく人を埋め

高木滿山句抄

默々と路傍の草の無抵抗
おぞましく續く鬪爭史のページ
絞らうとして微笑を投げかける
永劫のうちの一と時一人居る
さもあらばあれ一つしかない命
これ程に稼げど金が振り向かず
したゝかに名の煩はし名の世界
滿たされぬ心を赤い手が招く
とがりゆくものに心と頰骨と
衰ろへを知る靜脈の浮いた腕

玉造松園句抄

法樂を捧げて見たい欣求の日
洪笑を求める輕い嘘一つ
或る日ふと妻に浮んだ處女の影
ひんぬいた積りで土へ根を殘し
人絹を知らず蠶の吐き續け
我が物といふしばらくの米俵
呑舟の魚は笑つて網を見る
掴まれた藁も一緒に沈む底
溶けあわぬうちは氷と水で居る
極惡の骸の上の大石碑

田邊霞村句抄

敢然と起てば風ある幟竿

氣の毒な事は疊の上で死に

石塔になつても人に磨かせる

おとなしい人へ最後の無理がくる

馬鹿にするから馬鹿な事をする

人間として呼ばれたる日の歡喜

擊たれたる枝へ歸りし鳥なりし

次の子へ又ふくらせた乳房なり

懷疑そと續けるものを夫婦とや

何事も棄てたと人にいふ未練

田卷秋缸句抄

眞んまるに膨らんで胃が躍るジャズ

繫がれて居れば馬さへ張り切つて

若き血よ白紙の明日へ何を描く

砲列の前に何一つ生き物がない

一線が持つた自信と豪宕と

首輪を捨てて撲殺された

種子を握つた拳を靜かに開く

田原是空句抄

花の山女は花にたとへられ
揺り起す相手が出來て朝寢なり
直前の死線は知らず超特級
田圃道蛙一々かしこまり
減俸の憂さに泣く身が美まれ
逢ふ迄の苦勞を逢ふと喧嘩なり
不圖逢ふて親子を名乘る恥しさ
增俸の沙汰に晦日の顏の色
山門を入れば味噌燒く匂あり
入門の日だけさすがに殊勝なり

永井草明句抄

血眼で掴んだ今日のはした錢
トゲのある飯を喰はして血を搾り
俺達の汗を地主は倉へ積み
白日の下に俺等は無一物
血まみれの中で性格ひん曲り
生活の苦闘のまへに虛僞の楯
瞑想のなかに溺れて居つた自己
痩せこけた頰に思想を刻みつけ
明日の日が待てず胃の腑の決議文
尖つてる心のまゝで錆びた針

堤水叫坊句抄

煙突が疲れた村へ聳え立ち
夜なべした分も地主にみな取られ
凶作に米成金の大普請
小作餓え稲の穂波に胃が痛み
別荘の風上にねて肥をまく
百姓が押し頂いて借りる米
代々が遊び疲れてまだ地主
けなげにも鎌光らして小作の子
村を逃げ町の工場で馘首され

食ふて寝て不足を言ひに來る社長
ふところ手今日の資本を倍にする
賊彈に倒れ巡査部長を贈る
心臓で温めてゐたビラを貼る
ピツシヤリと閉めて覗かせもせぬ金庫
表彰式なるほど柔順な小使
ブラジルの土になりたくなるも貧
身の程を知れと奴等はみなけちだ
うろついて腹をへらすでないぞ餓鬼
塵箱へ犬より先に苦力の手
働けど食へぬと叫ぶ首の垢

中島國夫句抄

地を包みきるまで雜草踏まれてる
下積の激情を燃え上る石炭
ガスマスクのいらぬ世へ地球をころがし
エンヂンの急所がまとふナツパ服
壓搾空氣となる日重壓へ向き直り
崩れるものをみんな崩して大衆一過
機關車となつて世紀を引きずるんだよ

×

カラクリを知らぬ軍歌が勇ましい

進軍喇叭の眩しい錯覺
ロボットにされて指揮刀振つて出る

×

銃口が噴く感情のあ・りつたけ
彈道を走る妥協のない叫び
いつはりを脱いで鐵骨燒け殘り
眞劍を描いた汗の直線

×

陽をしぶきしぶく噴水の感情
童謠が押し上げてゆく丸い月
大洋の夏をはばたく帆の若さ

中谷默郎句抄

黎明の國のま底に笑む髑髏
黄金に押されて闇に葬られ
闇黒の中に世紀の叫び聲
天下の大道を行く土埃り
涙壺涸れたる底の白々し
緊張のまゝ只中に泣き崩れ
敗けてやる瞳の奥にある誇
秋の灯に蠟人形の冷めた過ぎ
棺桶の豫約に必死の努力

沈默の中に求めてゐる瞳
地主と云ふ弱者にされたまゝの秋
俺達の膏血で妾宅の練塀
眞實を叫ぶ奴より馘首する
碧空へプロレタリアの鬨の聲
ルンペンに歪んで見える地平線
倒れそうもないから妥協
永遠の謎を見つめる髑髏の眼
恐ろしい力を祕めた伏字なる
いとおごそかな乳房のふくれ
破れ靴そろへて呉れる妻の痩せ

中沼若蛙句抄

浦島の頭の上を浪の音

悪筆の困らぬ迄に成功し

背比べを濟まして猫は飛び掛り

安三味の儘で藝者に突出され

獄門の大將株は喰ひしばり

祈禱中狐は去就を考へる

スケートは池の寒さを追ひ廻し

上官を蹴て廢馬の群に落ち

鷄はペン先程の舌を持ち

新柄と云ふは木綿の事でなし

地獄にて是を釘拔とは云はず

寢せ付けてから半分を母は食べ

支那料理雜巾バケツかと思ひ

刺繍屋は苦心の跡を裏に見せ

豆扇顏を隱して出る笑くぼ

笠竹の一本毎に運を秘め

懷ろの物差みんな異つてる

米を搗き灯を點けて水街へ出る

引越しに猫は一匹づゝくわえ

葬儀社の株を坊主も少し持ち

棒讀の合間に和尙息を吸ひ

彈ける妓の悋氣は直に絲にのせ

草刈は露も螢も共に刈り

新人と云ふは小作の悴也

捨てる灰刃向ふ樣に立上り

蛇遣ひ搦まれたまゝ用をたし

亡者だけ白く浮いてる地獄の繪

秋の魚鋭く引いて釣針を逃げ

舌を出す時本當の顏になり

扇の字次から次ぎへ讀めぬ也

床柱皆ブルジョアのつけた艶

佛にも技巧があつて經の節

待て居る荷馬車前荷の藁をたべ

岸壁を船の出たあと船の塵

明日生きる事にして置く明日の米

賣られ行く蟲へ殘つた蟲が鳴き

ウエートレス疊へ來ると藝者めき

醫者二人同じ見立ての手を洗ひ

よれて出る鐵屑錐に湯氣を立て

葱の皮一枚だけが土を知り

工場に裏切者の焚く煙

釜の蓋湯氣を押へて飯になり

夏探がす借家木立の持つ魅惑

叮嚀に御辭儀をすれば痛む腰

人間の毛穴を汗と蚊が見付け

釣針は海の寶に觸れただけ

落椿程に女工の首を馘り

泥を吐け〳〵と救世軍太鼓

表戸に猛犬ありと書いて留守

豚の癖に何の不平を鳴らす鼻

中尾成愚句抄

大雨だ風だ雀等何處に寢る

腹の立つ頃にはお米切れてゐた

谿深く氣高きまんま萎む百合

ことごとを丸めて地球突走り

遺言か…骨はあの子にやつて呉れ

國籍はどうあらうとも日本の血

炎天を曳く牛の眼にぶる鞭

腹癒せの鞭を馬車馬受けて無事

金儲けに引出す肉彈三勇士

進化論つまりは人が人を喰ふ

仲田眞紗志句抄

理不盡に脾腹蹴られて搾られる
庖刀の怒に指を殺ぎとられ
今日もまた無縁佛の增えるらん
すかたんを喰つてポツクリ折れた自我
ガツキリと嚙んで捕鼠機の無表情
錢の音俺の心に媚びる音
情慾を拒んで馘になつた女工
新らしい世紀人間の合理化
ニンマリと俺の若さを覗く闇
狂つた齒車に指先の鈍感

中津江伊佐奈句抄

傳統がうつすら殘る松飾り
人生を嘲ける樣な淵の色
ホロ醉ひの鏡の底に映る過去
明るく生きるがための嘘僞ですよ
哀愁の瞳に遠く陽が落ちる
羅針盤の無い淋しい人生
啼き慰む小虫に迫る秋の底
燃えろ〳〵坩堝の溶ける迄
縛られまいとする頑張りの脆さ
憎嫉の双翼して迫る群

中山夜泣石句抄

生きたいからだまつてついて行くのだ

張り倒されても眞直に立たう

手の土を洗ひ指輪をはめて見る

痩犬へ與る眞似をしてなぐりつけ

ぐつすりと寢込んだ時と死んだ時

充分に食つて戀して生きる蟲

女だつたら貞操賣れもした

參政權よりも白粉を塗るが好い

妻と言ふ名に貞操さいなまれ

青春を味ひ切つて血の嘆き

名川邑人句抄

食ふだけの足音朝の露次を拔け

子澤山返事をさせて用が無い

名人が默り始めて二日經ち

氣の毒な財布を拾ふ年の市

いま月の出るビルディング眞四角

ラヂオ屋の入齒が動くホームラン

丸藥は返事を一つ溜めて呑み

子の育つ事が嬉れしい作業服

蝙蝠を見てから元の手暗がり

筏乘り谷の綠りに染まりそう

内田銀川句抄

悠々と霧を破つて陽の王座
春までは枯木と知らず勞はりて
滿足な寢息にぬれる絹蒲團
振り直す事を許さぬさいの目だ
課税を逃げてのさばり立つ墓石
餌に惚れて居る間ぴつたり下りた錠
貧民窟におつこちた滿月
あやまりを傳へ傳へる事久し
人間の腹をくぐつて振り返り
掌のどこに壽命が書いてある

内田小唄呂句抄

戛然と落ちた正義の巨彈なり
アメリカの土と肥料で櫻花テンマン
一滴が生んだ百億兆の人類
しじまを破る戀の口笛
警察の前だと痛い脛の傷
みとれゐる心のすきをのぞかれる
隱しおほせず秘密をしやべつた

倉光唐四郎句抄

やゝ力抜けし三月なる密柑
陽當りに樂々と寢る丘の勾配
選ばれて出た一人の大きな手
妻の眼が澄んでるはれ〳〵出る
一吟を忘れ一魚を釣り得たり
力なき髮かな根なし抜毛かな
微風もつれてこの陽だまりに渦
林檎の皮のはりつきし夜更のテーブル
獨りになれば川が流れる
盲が石を蹴つた

山口○坊句抄

立ち割つた竹にはつきりした個性
何事か叫ばんとする口紅の赤
闇の底そこから這ひ出さんとする叫び
荒れ狂ふ怒濤となつて巖を打つ
爆裂を前に口火の重い沈默
若者といふ歡びに飢ゑて居る
滲み出る汗一滴の辛い粒
片腕をひんもぎられて勳八等
血と汗の交叉に立て飢ゑてゐる
ピッタリと俺の氣持に合つた影

山中自笑句抄

大空の星それ〴〵に持つ個性

北斗星下界の闇の羅針盤

スイッチを押して隣りの暗を追ひ

無意識に無意識でない鍬を振り

一段二段三段構へに引かゝる

トラックへ切られた首の荷が積まれ

眞人間だけがぢだんだ踏んで居る

斷崖へ力一杯しがみつき

もう力盡きた流れが此所に涸れ

ツルバシの錆びる日研がれ行く思想

痩せ細る影がひよろ〳〵地に動く

ぽつてりと落つる雫も秋の聲

電燈に重なる蟲の地獄壺

しつかりと蟲が摑んだ草も枯れ

ぽつかりと鯉浮き上る花の影

人生のこうした春は永からず

狂態の眞上に花は咲いて散り

驕樂に隣なるコックの脂汗

毛蟲等の食ふ既得權櫻の葉

奇蹟ではない眞心のあらはれだ

山村比呂志句抄

捲がれるまでを南瓜の憤激
葉卷啣へて失業對策
一九三〇年度斬捨御免案可決
折れて〳〵鉛筆の末路
缺食の兒童にせびる慰問品
財閥といふ版權を持つてゐる
血涙を呑んで擔架の人となり
免狀を握つてパンへ猪突猛進
衆望と輿論隱居をかつぎだし

俺は知らぬと陣笠を懲戒免官
精勤の名へ隱忍をあてはめる
溫情の囮に菜ッパ服もがき
ありついた恩給へたばつた風采
溫厚篤實老朽までの首
凡人なれば品行方正
護衛付社長でつぷり脂肪過多
本箱の氾濫知識の不行儀
凡愚を封じた尨大な辭書
偶像を描き群疑の躍る血塊
瘦軀鶴の如き硬骨

山本銀雪句抄

牛乳が涸れればやがて殺される
獨りでないことがいつそ弱くする
聲擧げて泣ける赤兒が美ましい
偉くなつたから書かれる立志傳
愚かしい自分が呪はしくなつた
五穀稔つて百姓踊れず
女なら喰つて行かれる世相とは
虚か實か戰地にゐる意識
誰人も見たわけでない地動説

斥候へ裾野の秋は暮れかゝり
幸福の一歩手前を歩かされ
雫と雫つながつて一つ落ち
下山してから富士を蔑み
眞白な手で勞働を讃美する
首を馘る機械どつかと備へ附け
大海へ向ひて何も言ふことなし
運命にして運命を呪ふなり
お前は雜草だと雜草刈られ
何處まで行けば眞理があるんだ
遠い灯を目當てに行けば蹴躓づき

山見風柳人句抄

萬卷の教へを飢ゑがゆり崩す

踏臺といふ因襲を割れよ石

忍從の總決算ぞみんな來い

火のついた火繩最後のものにふれ

なま水で胃の腑しばしばだまされる

カツとなる時は牝牛の角も冴え

彈壓に命をかけて起つ拳

からくりのつぎ目つぎ目の腐れ釘

火のついて居る爆彈を中に醉ひ

金殿をゆする時代の大嵐

不幸へつけ込み神を押し賣る

飯を喰はせりやまだ〳〵搾れる

殺されてもよいと約束しろといふ

心まで縛る鎖りがほしからう

ほとほりがさめたら馘にしてやらう

デングリガヤツた階級の踏臺

二枚舌廻轉椅子の向きをかへ

けしかけるだけの風なら火は燃えぬ

別な目で見れば陽氣なヨイトマケ

ひからびた肉が最後の武器になる

墓穴にくれる最後の搾り粕

絞め殺すまでは氣づかせまいとする

責任逃れに舌がせはしい

いざといふ日には戰旗になる蓆

飢死にの活字が足らぬ新聞紙

憤然と虐使の鞭へ向き直り

剝げ落ちる壁へぺんきを塗る文化

傳統をブチこわす素晴らしい掛け聲

目かくしを取る迄馬鹿で居ればよし

蹴合鷄蹴らねばならぬ日を怖れ

山口屋素山句抄

旱天に惱んだ時は慈雨と云ひ

魂を拔かれて飯も腐つたり

子守唄聲もかすれて寒い暮

グブツイタ金で墓場を掘つて行き

空論を闘はすよりハンマーで戰へ

岩角に根上り松の根の努力

腹一杯鳴いて黎明へ更生へ

爆彈に碎け渾然靈と肉

逆境に立てばドイツもあちら向く

チクタクとせき立てる時計の焦慮

山本一線句抄

伸びる兒が親の苦勞の種となり

金ぴかに守らるゝ着流しの大官

やつと借りたのに泣かれてみんなやり

視察した男嘘でも見たで勝ち

屈從の遁辭でもある默認

衆議に一蹴された正當な主張

惰眠と見せかけた泥坊の晝寢

獅子吼して出たが日比谷で默りきり

囹圄に甘んずる空腹の絶叫

獸慾の深夜となりぬ宵の戀

山内日出坊句抄

昭和七また三柱(はしら)のいくさ神

門閥が生木を裂いて二人死に

振鈴で新米議員身つくろい

頬かむり裏木戸叩く若い兄

髮結の家から長い首が出る

人生を呪ひ鐵路にその枕

門構へ件の女主住み

停電に魔の手そろ〳〵伸びて行き

享樂の刹那々々を箱枕

泣き上手首尾よく玉の輿へ乘り

矢原無瀬井句抄

春の宵伸びる若芽の音を聞く

オンドルの温さに眠る冬の精

光りがくツついてとれない八月

波の音今朝郷愁の胸がなる

五月雨の音の輕るさも旅心

寂しいのに笑つて下りる

思ひ出が疲れた街へうづくまり

できかけた思想を捨てゝ春へ立ち

落ちた葉に思ひツきりの日があたり

逞しい腕で二月の闇を衝き

前田盜閑句抄

恐ろしくなつて日記を畫間書き

恃まるゝ身にからみつく長男苦

同じ日に飼はれて一羽まだ啼かず

陽に透かされて腐卵の暴露

火事除けの札も一緒に燒け出され

ぼろ〳〵の聖書を抱かへ飢えてゐる

休戰の刹那の彈に五六人

枯死近くなつて天然保存樹

廢兵へやがて冷たい日本人

同じ山に生れた鐵が鐵を斫る

萬木東狂子句抄

安全燈鑛氣は咽ぶ樣に降り

氷嚢の下を頭の毛は伸びる

生きて居る顏へ冷たい飯が飛び

盲人の僞りでない笛を吹き

藥屋の棚に搦むだ儘の蛇

永劫に巨匠不滅の線を引き

亂枝へかゝわりもなく水迅し

亂國の隅に佛の祀られる

頰白よ唄へ餌壺へ陽が踊る

水晶の珠數にも裟婆の風の色

頤を落して馬鹿の大欠伸

金ペンが光るガランとした試問

寒いとも暑いとも知る膝頭

阿片窟生命線は掌

灰汁桶の灰汁へ一杯雲去來

ゴム消しの如き或日の頭腦哉

冷笑の眉を伏せたる腕時計

アスファルト遠く雨夜の吊ラムプ

山を行く山のひろさへ追ひ縋り

ダンサーの瞳うつろに春は逝く

松尾柳思朗句抄

貧乏の弱味へかざす誓約書

餓死凍死そのまん中の酒池肉林

剛情ぢやないがまことは曲げられぬ

饗宴へ唯貧乏の血がうづく

とぎ上げし鎌に亂るゝ息づかひ

どの首が飛ばうと鉈の知らぬ事

廢兵を皆が名譽の名でしばる

蹴落しておいて白々しい素顏

追縋る心虛空を踏みはづし

排泄口のない憤懣をにぎりしめ

どたん場でしどろもどろの二枚舌

天日に曝す社會の繪卷物

小突くのに飽いた最後のしばり首

病魔にはかてぬ金にはなほ勝てぬ

うろたへる肩章セヽラ笑ふビラ

おいぼれの腰に利鎌を持つ强み

歡樂の灯へ奔流の荒ムシロ

よろ〳〵の足轉落の綱渡り

あさましい姿を笑ふ賽がわれ

武器となる日に冴えかへる鍬の肌

松田柳湖句抄

茶話しが冷えて擴がる地獄の繪
その腹が何時か丸見えになつてゐる
地獄繪を描く彩管は鞭であり
大馬力時代を刷り剝く印刷機
搾り糟漬ければどの色にも染まり
先走る年へ若い血が叛き
浴槽で鎖の痕を摩擦する
自動車に吠えつかれ乍ら漁るパン
いろ艶はカッと照る陽の思ふまゝ

白色白光の治下に黒色黒光
ばつたりと野倒れ死にする犬ありや
豊満な乳房へ塗つた唐がらし
ルンペンが羨むだらう燕の巣
妊娠をさして不安な日がつゞき
表現の不足を愛づる親心
世の中を加筆して〳〵組み直し
悲しみの矢面矢面に立つ自信
ばつとせぬ血管へ注したコツプ酒
風鈴を揶揄ひに來た夏の風
燃え盡きて漸やく大事な燠となり

口紅も淋しく夜の渡り鳥

注ぎ過ぎた酒で感情地へこぼれ

人間より滯貨の方が捌かれる

隙間なく詰めて詰めて壓搾し

子に許す心任せの泣く權利

太古から吹き消されずに月は冴え

放牧をされてる様なプロレタリアの子

見えぬ眼で甸はれる限り甸ふ蚯蚓

名も知れぬ一塊りに俺も居る

精力を逃がすものかと蓋を閉ぢ

搾木から外づれてないかと見て廻り

搾木から一寸外づせと逢ひに行く

別れるも逢ふも慣れ切る大工場

裏切を悔ひたか自滅の流れ星

素つ裸になつて柿それ自身の澁を抜き

切身にされても肴の個性

片戀を食ひつ食はせつして女給

偽りを脱ぐ暇もなく俄か雨

人が歩くのに俺は駈足

人の聲頭の上で散る火花

背嚢を汗が貫く平和な日

神様の方から賽錢取りに來る

へとへとに疲れた隙へ調停者

着くまでにだんだん痩せる米俵

自治制といふ有がたさ教師飢え

白骨が積み累なつて僧の富

藁を掴むのに冷然と堤を行く

着飾つて直立不動のまゝ倒れ

亡靈の彷徨ふ頃に配給米

地盤いま危ふくなつたので國士

他愛なく棄てれば身輕るに浮き上り

栄つ葉服お前が悪いといふ規則

親切の蔭で謝恩の糸を引く

ともすれば親の嘘まで崇めさせ

保護なしに大道歩けぬまな娘

偽りの廣告塔に眼を突かれ

當然の賃銀へ頭の急角度

すき腹を禮儀作法であげつらひ

問題とは關係のない虚を衝かれ

及ばざる事の夢にうなされる

痩せても枯れても離れぬ手足

三角な紙など張つて何處へやる

無くなつた油へマツチを擦る光り

追ひ詰める蓋へ纖細い腕必死

火があれば燃えるばかりの胃で索し

浩瀚な著書の重さに眼が倒れ

疲れ切つてこの手足まで邪魔になり

ぽんとうを他人が嘘で築き上げ

時として頭が二つ欲しくなり

情慾を消すのに五十年六十年

斯くすれば斯くなり行くといふに陷ち

一錢もなくて滿洲の地圖を見る

闇黑をポツチリ喰つた田舍の灯

眞つ直ぐに飢える空家へ犬歸る

ボロボロになるまで名畫の私有慾

傷けぬやうに狙ひを定めたり

熱すれば毒か消えたと思つてる

さまざまの矛盾を塗つた金の色

新らしい血の通ふまで針を打ち

牙のある口でけだものの乳を吸ひ

ざわめきをせゝら笑つて陽は西へ

その聲で輕妙に濟む蟲の戀

隔離した病舍に非ず工場なり

幌蚊帳の中に春野の花盛り

一匹二匹三匹四匹と罠に陷ち

トロ押しのいのちへ突つ立つ崖の色

べつとりとルラ（印刷肉棒）へ粘つた搾取史

合鍵を持たぬ同志で扉へ迫り

怪談を暑く聞いてる勞働者

生れるや否や小猿につく鎖

ドッと迫ればッケの賣切れ

忍從を抵當にしてパンを借り

神のない子を祈つてる親心

押しつける宿命の手を拂ひのけ

大地から根よく吸つたトマトの血

むらむらと燃しては見たが俺も噎せ

草分けといふ花々しい足に枷

憚りもなく蛙一齊に青春譜

汗拭かぬうちに三日の花が飛び

疊まで俺と一緒に日に燒ける

松永美吉句抄

鳥籠に鳴くべくあたり春が來る

らんまんと咲いたその夜の雨となる

車曳く熱砂に鞭はあげられず

ころ〳〵と安定へまでころぶ玉

混沌の大東京を埋める雪

半分は埋めた庭の石の價値

ぐつすりと眠る聖者となりきつて

血の色の夕燒へうつ大梵鐘

轉ぶ石石を誘ふて崩れ落ち

ほろ〳〵の帆へはりきつた風である

丸山千噫樹句抄

乳卷いた木綿の端を襟に見せ

心中の未遂の後は他人なり

金銀の物言ふ國を神の國

大金を手に妄想の走馬燈

一朝にして名を轟かす殺人鬼

儲けたいから損をする相場師

神社の境内に金持の廣告札

大噴火遠くで見れば凄絶美

化物のやうに金歯が笑つてる

長生きをして働いてさげすまれ

富士野鞍馬句抄

偽りの都會ときめて歸農する
二等車で家賃のとれぬ愚痴をきゝ
お晝にも一本ほしいすゞめ燒
戀人へ拗ねてはゐない横座り
一周忌いつそ女給になる覺悟
人相を女衒がほめる糸切歯
三菱を龍車にたとへあきらめる
生き殘る社員訓示にホツとする
丹前になつて御召のすぐやぶれ

家つきの物足らぬまゝ子が生れ
藝妓みな二十二三で面白し
欠損は下級の知つたことでなし
左から御順へ右から女來る
堆き履歴書へ又頼みに來
波の音やかましく又なつかしく
鮎のうまさに梅雨近づく
大工場化學の中の赤鳥居
考へはいつものとこで行つまり
本結城非難をいへば帶の柄
手拭をとれば米屋の妻も髷

鐵瓶が吹いて思案を向けかえる

プロマイト娘心はためるだけ

我物であつて萬年筆の癖

主婦の友男に思ひあたること

後押しのむすめに娘らしい柄

終電へ草疲れて乘る鬘下

緊縮を遊べ〳〵と驛へ貼り

女事務啄木集を讀みは讀み

日本には腹かけといふものがある

大東京に賣殘る學士樣

古込一輪句抄

忍從をかなぐり捨てゝ世に對す

燃えあがれ風を誘つて火の力

非を鳴らすものに冷めたき瞳をくれる

こみ上げる涙に混ぜて賣る微笑

麥飯に支へ疲れた五尺の身

瘦馬の蹄にそむく地の悲憤

高處からまだ爺婆を欺ます舌

青春の血に眞黑な海女も戀

今死んでもさ二十年まるもうけ

寒からうかまどのそばのマツチ軸

藤井赤とん坊句抄

ありたけをかなぐり捨てりや人が去る

燃え殘るもの〻姿にある魅力

人形へも皆んな話した感激

引ちぎる强さのあとがたゞ女

獸心の群に目隱し强いられる

殼を出て飢え切るまでの無表情

まどろんだ其の魂を起こす秋

戰爭ださアさいころを振つてやれ

壺の金ホト〳〵壺にあき果てる

忍從を蹴れば見舞の金包

感情を兩手にさげてひた走る

我に似る子に似る姿たゞ悲し

だあまつてたゞ貧線をたどる露

おろかさをキツチリ積んで寢轉がり

踏みつけた懷疑ムク〳〵起き上る

筆の穗の尖り行く日の氣も尖る

うなづけば春に急かる〻戀衣

土打てば土の皷動にそれる靴

打伏せば生きる喜び込み上げる

草を食む時がほんとの馬の姿

はねかへるその淋しさの底の笑み

抱きしめた壺の中なる主義もなく

一粒の算盤玉の亂舞かな

胸の火を燃やせば暗らい顔になる

どれまでが清貧なるや疲れたり

心のみ鋭く病なほ癒えず

束を見せられたプロの線香花火

人間を脱ぎ捨てし殼の默人

巣をつくり上げて梢の凱歌かな

さあ今日からけだものの仲間入りだ

藤田西風句抄

蟷螂の斧へ夕陽が落ちかゝり

泣き面へ蜂の姿の雨が降り

温情の血がそゝがるゝ危篤の子（輸血の訓導）

激突の悲哀死脈へ狂ひ落ち

餓切つた腹に法網など知らず

黎明の空出陣のラッパの音（上海事變）

奮戰記一字々々が血でぬられ（同）

もう會へぬ倅は父の夢枕（同）

此の姿大日本の守神（戰死）

赤い手がのびる三百六十五日

古川一匹句抄

白々と草の葉裏が秋に媚び

歡びの頂天から眞つ逆さま

燒鐵の悲鳴を水が嘲笑ふ

積む雪へ春を信じる麥の青

貞操へ爪を隱して寄つて來る

返り血をあびた軍雞の凱歌

はちきれそうな風船玉の忍從

大望を土に抱かれて眠る種子

信念は神に目があり耳があり

正道と邪道の岐路に惱む饑餓

信念の前に紙幣束の媚態

永劫に消へぬ寫眞の微笑

空腹だから落ち込んだのだ

個性を捨てゝ落ちた隕石

明日と云ふ不安に向いたふくらはぎ

安定と云ふ飯臺をたゝむ音

乳の出ぬ乳房となつて世を呪ひ

金權を笑ひつゞけて死に面し

笑つてる隙を蝕ばむ明日の糧

武藏野の闇を縮める灯の都

草の喰へない人間の慘めさ

兩の手に持ち餘ますもの尙惜しみ

うち返す土の香を吸ふ四月の陽

饑餓線を越えて無欲な眼の光

人間を疑ひきつた鍵の音

トタンの米櫃へ鼠の不平

追想の果に悲しく踞まり

陰影をはつきり投げて灯る秋

空腹とパンの間の牢穴

大沙漠水に飢へたる月の色

深野千里句抄

むしやくしやと夜晝なしのめくら

黒柿になりきつてゐる床柱

雪で井戸埋め埋めて五十年

見るたびの狂人の偽はり無き顏

冬空へ無駄を伸びてる避雷針

人間を締める皮肉の細い繩

製材所無駄にならない無駄が出る

泥濘に媚びて蠟蝋の赤い腹

鎹の義務に怒つて立つ仁王

意氣地なく蟻に負はれて行く蝶々

福澤可樂句抄

唯我獨尊グツト突き上た欠伸

歪むなら歪め又張る虚僞の糸

地球が逆轉したら喰へるだろ

合掌の中に後進の籠る息

五千年嘘で固めた釋迦の智惠

口だけの說教だ耳だけで聞く

人道を歩まないから鐵鎖

ルンペンの汗は背骨で持久戰

子子に有爲天變の浪頭

線香の點つた后も白い灰

名も聞かず喰つてしまつた慈善鍋

どの渦が運命線をのつ切るか

温室に春夏秋冬知らぬ花

戰爭ゴツコだ誰か支那兵になれ

新國家俺は路傍の破れ靴

眞面目でも喰へず不眞面目でも喰へず

盲目だから眞直な道を行く

貧しさを敷き淋しさを着る夜寒

絞る手も絞らるゝ手も指五本

あの少さい壺に八十年の夢（父の死に）